

第5学年 総合的な学習の時間 学習指導案

生駒市立俵口小学校 教諭 中川 純一

1. 単元名 四日市ぜんそくに関わった人たち ～ 様々な視点で考えてみよう ～

2. 単元目標

- ・高度経済成長期の社会を生きた多様な人々の立場に気づき、産業が大きく発展した様子や公害による被害の実際を理解する。 (知識・理解)
- ・高度経済成長の影響や社会の様子、当時の人々の思いについて多面的多角的に考えたり、公害が深刻化した要因について考え、自分たちの身近な社会との関連について気づいたことを表現したりする。 (思考・判断・表現)
- ・高度経済成長期の社会の様子を手掛かりとして、現代社会や身近な生活の中にある問題点を見出し、関心をもつと共に、よりよい社会の在り方について考えようとしている。 (学びに向かう力、人間性)

3. 単元について

(1)教材観

本教材は、四日市ぜんそくに関わった人々に思いに寄り添うことを通して、当時の社会構造の複雑さに目を向けるだけでなく、自分たちの社会や生活と関連付けながら考えることを促す教材である。

日本は終戦後、1955年から1973年代頃までの約20年間に渡り、高度経済成長の時期に入った。1950年に朝鮮戦争が勃発したり1964年に東京オリンピックが開催されたりした時期である。この間に人々のくらしは大きく変化した。焼け野原となった町は、高速道路や新幹線が走る線路といった交通網が整備された。また、電化製品において「三種の神器」と呼ばれる、洗濯機・カラーテレビ・冷蔵庫が登場し、国民の憧れとなっていた。人々が豊かなくらしを追求し、大量生産・大量消費の仕組みが社会全体に広がった時代である。

一方で、経済成長の弊害として、様々な公害問題が生まれた時代でもある。四日市市では旧海軍の燃料製造施設の跡地に石油化学コンビナートが建設された。四日市市は全国有数の石油化学工場都市となり、町の人々はその恩恵を受けていた。一方、近くの海にすむ魚から異臭がしたり、海からの風に悪臭がしたりするなど、当初予測されていなかった数多くの問題も発生した。特に、コンビナート付近では、大気汚染の影響でぜんそくの患者が増えた。これが四日市ぜんそくである。

四日市ぜんそくの原因物質を排出した企業の責任は大きい。ただし、この問題を企業の責任として捉えていては、持続可能な社会の担い手として、よりよい社会の在り方を考えることは難しい。四日市ぜんそくがこれほど大きな被害をもたらした要因の一つに、多様な人（主体）が関わっていることが挙げられるからである。企業や労働者としての四日市市民、被害者としての四日市市民、管理する立場にあった行政の他、豊かな暮らしを追求し、大量生産・大量消費という社会構造を底支えした国民を当事者の一つと捉えることもできる。こうした多様な人（主体）の立場が存在する複雑な社会構造に目を向けることを通して、少数派であった四日市市民の思いに気づいたり、四日市ぜんそくの実際やよりよい社会の在り方を考えたりすることができる。

(2) 児童観

本学年の児童は、これまでに社会科と総合的な学習の時間で「地産地消」の学習を進めてきた。児童は、生産者や消費者の主体から地産地消を進める利点を考えたり、耕作放棄地を貸す側(生駒市)や借りる側(市民)で活動する人と出会うことで各主体の価値観に迫ったりすることができた。また、障がい者理解の学習では、聴覚にハンディキャップのある方との出会いを通して、手話を通して当事者とつながることができた。児童は、日常のくらしで使用する機会が少ないと考えられる手話を使って、当事者と関わろうとする姿が見られた。

しかし、児童の見方や考え方を広げるためには、全体的な事象を俯瞰的に考え、行動する力が乏しいように感じられる。道徳の授業の際に他者に感情を寄せることに終始してしまっていたり、人権作文では自分と他者視点での記述が非常に多かったりする。生活経験において、主観で物事を判断し行動していることが多く、全体の様子を考える機会が少ないことが要因だと考える。本単元では、複雑な社会構造が絡み合うため、環境汚染の出所である工場だけが悪いと安易に言い難く、高度経済成長期の社会を俯瞰的に見ることを通して、本質を見抜く必要がある。時折、学級で話し合う機会では多様な見方の視点の重要性を伝えたり、作文指導でノートのコメントを通して具体的に書き込みをしていたりしているが、不十分だと考える。そこで本単元を通して、多様な視点で物事を俯瞰的に見つけ、それぞれの立場の価値観に関心を寄せることを通して本質を見抜く力を養いたいと考えた。

(3) 指導観

本単元の導入では、まず工場夜景の写真を提示し、感じたことや知っていることを自由に発表させる。観光地ともなっている美しい夜景であるが、この後の展開で示すように高度経済成長期の公害を想起させる景色でもあり、学習が進むにつれてその二面性に気づかせていきたい。また、この写真は単元の途中や終末でも適宜活用し、児童が自身の見方・考え方の変化に気づけるようにしたい。

次に、高度経済成長期の日本の様子について児童自身が疑問に思ったことを調べさせ、主体的な問題解決的な学習を支援する。児童は高度経済成長により日本が発展していったことや「三種の神器」と呼ばれる電化製品が登場し国民のくらしが豊かになったこと、また弊害として生じた公害問題によって人々が亡くなってしまうことがあった等が調べられると考える。

そして、四日市ぜんそくに注目し被害者に思いを寄せることを通して様々な立場の価値観に出会わせて学習を進めていく。当時の社会構造に目を向けさせるため、①日本社会全体を捉える視点、②被害にあった四日市市民の視点、③当時の企業や行政の視点、という3つの視点で考えさせる。①日本社会全体については、大正時代から続く(株)グリコのおかしとおもちゃを提示する。このグリコのおもちゃを見ていくことで、戦中前後から高度経済成長期に移る時期において民衆の憧れが変化していったことを捉えさせる。②被疑者の立場に立って考えるために、当事者との出会いを通して、その思いにふれさせたい。例えば「現在、工場の夜景を観てどのように思うのか」「当時公害にあつて、現在ほどのような思いでいるのか」といった体験者としての語りに出会わせ、公害の問題の大きさ深刻さを感じ取らせたい。また、③企業や行政に関わった人にも話を伺う。まず、児童が思いつくのは企業や行政が工場を止めなかったことへの責任であると予想される。しかし、教材感でも述べた通り企業や行政だけの責任と考えるのは不十分である。そこで、話を伺う中で、懸命に工場で働いていた姿や当時の社会の発展を支えていたという点にも気づかせたい。こうした学びを通して、それぞれの主体が何を重要視したかの価値観に迫りたいと考える。

さらに、現在の社会や自分たちの身近なくらしに同じような構図がないか見つけ直す。生活がより豊

かになってほしいと願う人々は大多数派だということに対し、被害が出ていることへ考慮し対策を講じていた企業と行政や四日市ぜんそくにより被害にあった人々は少数派である。このような社会構図を整理する中で、「何が必要だったのか」を自分自身に問い続け、じっくり考える力を養いたい。また、企業や行政の立場について児童に新たな気づきを促したい。それは公害に対して間接的な対策しか取れなかったことが、被害を拡大する一因となってしまったということである。四日市ぜんそくにより被害にあった人々の立場で考えると、公害被害の原因は工場であり、自分たちの生活を脅かされたことについての憤りを感じることは歪めない。一方、工場は企業の利益の追求のために、大量生産をしてきたことは確かであるが、その背景には当時の多くの人々のニーズに応えるという側面があったことも見逃せない。経済発展を歓迎した大多数の人々の思いに気づかせることは、現在の自分たちの暮らしへ立ち返るきっかけとなると考える。現代社会の人権課題とも関連付けながら、自分たちが無自覚なまま多数派になってしまっていることを認識したり、少数派だからといって他者を貶めたりすることはいけないことを気付かせたい。

それぞれの主体の価値観に迫った後、導入時に見せた写真を通してふりかえりを行う。児童自身に導入時と違った見方・考え方に会わせたい。そのような経験を通して、これからの人や社会との関わり方についての、内発的な動機の変容を期待したいと考える。

(4)ESD との関連

○本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

- ・相互性：公害問題だけでなく、現在社会においても多数派の意見を参考に考えが進み、少数派の意見が反映されにくい傾向がある。公害問題だけを孤立して考えるのではなく、現存する人権課題においても同様に考える必要がある。
- ・公平性：誰しものが住みやすい社会をつくっていく必要がある。高度経済成長により大多数の日本国民が恩恵を得たが、四日市市民は環境、人道被害を受けた。公平が保たれた社会を構築していく必要がある。
- ・責任性：公害問題が起きたときの、大多数である日本社会の立場、工場を止めることをできなかった企業と行政の立場、公害被害を受けた四日市市民の立場の各視点から日本社会の構図を適切に理解し、現在の人権課題と見比べて考えたり、自分の身近な暮らしと結びつけたりして考える必要がある。

○本学習で育てたいESDの資質・能力

- ・批判的に考える力：安易に被害者の立場で考えるのではなく、当時の社会的構造を理解し、各主体の価値観に迫る。
- ・多面的・総合的に考える力：四日市ぜんそくによる公害問題について、様々な角度から学ぶことを通して、本質を見抜くために多面的・総合的に取り組むことが重要であることに気づかせる。
- ・進んで参加する態度：意欲的に活動することを通して、当時の社会の構図を理解し、自分たちの暮らしと同じ構図はないか積極的に考えている。

○本学習で変容を促すESDの価値観

- ・世代間の公正：1950年代に発生した四日市ぜんそくによる人権被害や環境被害を受け継ぎ、次の世代に二度と同じことが繰り返されないように伝えていかなければならない。
- ・人権・文化の尊重：かけがえのない命を大切にすることは当然なことである。被害にあった方の思

いに寄り添い、誰しもが大切にされる必要があることを知る。

○達成が期待されるSDGs

- 9 産業と技術革新の基盤をつくろう 11 住み続けられる町づくりを
16 平和と公正をすべての人に

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
<p>① 四日市ぜんそくの被害を被った人々や経済成長を支えた人々など当時の社会を生きた多様な人々の立場に気づく。</p> <p>② 産業が大きく発展した様子や公害による被害の実際を理解する。</p>	<p>① 高度経済成長期の社会の様子や当時の人々の思いについて多角的多面的に考える。</p> <p>② 多くの被害をもたらした公害が起こった要因について、当時の複雑な社会構造をふまえて考える。</p> <p>③ 自分たちの身近な社会との関連について気づいたことを表現する。</p>	<p>① 高度経済成長期の社会の様子を手掛かりとして、現代社会や身近な生活の中にある問題点を見出し、関心をもつ。</p> <p>② よりよい社会の在り方について考えようとしている。</p>

5. 単元の指導計画(全13時間)

時	主な学習活動	学習への支援(・)	評価備考(・)
1	1枚の写真を見て、感じたことを自由に発表する。	・率直に感じたことや知っていることを発表するように促す。	ウ①
2	工場ができたときの日本の様子を調べる。	・図書やタブレットを活用し、グループで協力して調べる。 ・まとめ方は自由にし、児童に委ねる。	ア②
3	調べたことを発表し、共有する。	・児童が発表したことを黒板にまとめる。	ア②
4	「グリコのおもちゃ」から、当時の日本社会の様子を捉える。	・「グリコのおもちゃ」の変遷をたどり、気づいたことを出し合う。 ・当時の民衆の憧れや流行りであったことを捉えさせる。	ア②
5	四日市ぜんそくについて知る。	・大量生産において公害が発生したことを知る。	ア②
6	四日市ぜんそくに関わった人の思いに寄り添う① 被害者の方の話	・公害の被害者である立場から考え、思いや疑問、気づきを整理する。 ・被害者の思いに寄り添うようにする。	ア① イ①

	を聞く。		
7	四日市ぜんそくに関わった人の思いに寄り添う② 企業や行政の話聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・企業や行政が加害者と捉えるのではなく、「当時のつらざるを得なかった空気感」や「日本の発展のために一生懸命に働いていたこと」を感じとらせるようにする。 	ア① イ①
8	当時の社会構造の様子を整理する。	<ul style="list-style-type: none"> ・文字だけで整理するのではなく、図を使ってまとめるようにし、視覚的に捉えやすくする。 	イ② ウ①
9	単元の最初に見た写真を見て、再度感じたことを発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・工場の写真を見て、それぞれの立場の価値観を思い出して書かせるようにする。 ・困っている児童は、友達の感想を参考にすることを促す。 	ア① ウ①
10	私たちの暮らしにも同じような構図はないか考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・身近なところから、多数派がくらしやすく、少数派がくらしにくい社会や学校になっている側面や多数派の意見により、声を挙げにくいような同調圧力はないか考える。 ・少数派が住みやすい社会にするため、少しずつ取組が進められていることにも気づかせる。 	ウ②
11 12	興味や関心のある課題を選択し、まとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人がまとめやすい方法を選ばせる (Google スライド、画用紙等)。また、調べた方法を相手に伝えるために、発表の仕方を決める (口頭、ポスター等)。 ・伝達の終末には、「できること」を考えさせたいため、「個人としてできること」、「集団としてできること」、「大人になったときの未来にできること」等、多様な視点でできることを考えるように促す。 	イ③ ・伝えたい相手については、これまでの児童の発言や行動によって決定する。
13	調べたことを発表したり、交流したりする。	<ul style="list-style-type: none"> ・公害問題の起因である社会的構造は、現在社会でも起きていることに気づかせると同時に解決のために何等かの施策や声を上げている人がいるといった正の側面を知るようにする。 	イ③ ウ②